

私はこう
読む

「保育項目観察」——再考——

江波諄子

(元大学教員)

自在な文章家、倉橋惣三

倉橋は、若い頃から粹な文化に接しているので、学識を超えて洒脱な人だ。『婦人と子ども』の編集者となった第十二巻からは名前を別名表記で複数の文を書いている。昭和十五年九月号に掲載された本稿も、倉橋が保護者とのやりとりという形で伝えようとしたものと考えられる。幼稚園教育は家庭教育を補完するものなので、日頃の保護者の思いを現場から受けとめた上で、園での保育を家庭で理解してもらうためであろう。

ところで、前号(春号)で言葉の上品さについての言及があったが、昭和四十年代に筆者が交誼のあった美登利会(東京女子高等師範学校保育実習科同窓会)の諸先生は、「子どもは園では泥んこで元気に、登降園時は紳士淑女で」という考えのもと、園外での衣服の乱れや言動に配慮していた。先生自身も帰宅時には、帽子をかぶったり、素敵な装いに着替えていた。当時の丁寧な言葉遣いは時代とともに薄れながらも、いわゆる「幼稚園言葉」としてそこかしこにまだ名残をとどめている。

江波諄子(えなみ じゅんこ)

元常盤大学教授。1945年生まれ。

『場の保育論』(『日本保育学会60周年記念号』)。

『キーウエイティンの回想』(文芸社)ほか。

保育項目「観察」を振り返って

「観察」は、大正十五年の幼稚園令で新たに加えられたと捉えがちだが、当初から「博物理解」、その後「庶物」という表現で大切に考えられていた保育項目であった。実はその年、倉橋は東京市幼稚園奨学講習会で「観察に就いて」と題し、「私が定めたものでない——」と前置きし、講演をしている（『幼児の教育』第二十六卷第十二号（一九二六年））。

本稿とは対照的に学問的知見を述べ、観察とは実物に触れることで、幼児は常に興味や好奇心で観察していると言っている。観察を語りながらも、自発・芸術・表現・心像等との関係も明らかにしている。

また、フレーベル時代の幼稚園と比べ自然とふれあう機会が少ない幼稚園の「不精」を指摘し、努力を喚起している。季節自然暦、社会年中行事表、散歩、花壇、動物飼育等、

具体的な例も挙げている。

倉橋の言葉が普遍性を持つのは、常に現場（子ども）に即して、本質を実に具体的にきめ細やかに語るところにある。だから現場の保育者や母親にも非常によくわかる。ともすれば、最新の学問的リテラシー（難しい言葉）と実践との乖離を自分の能力不足として悩み、時にわかつたふりをした過去を今さらながら恥じる。大切なことはすべてやさしい言葉で言えるのだ。

本稿の「語り合い」に示される倉橋と母親とのやりとりは、実はその後の幼児教育界にも提言を残していると思う。「観察」という言葉が表舞台で使われるようになると、倉橋も危惧するように、自然科学の知識教育を描いてしまう様相さえある。観察させ図鑑を与え、名前や分類を覚えるを「良し」と受けとられ

がちだ。

ところが当初から、子どもたちは生活の中で、自然界や人間界のさまざまな事象について具体的に経験するのが大切と考えられていたのだ。時代の趨勢で、あるいは現場は試行錯誤だったかもしれない。が、現実の生活の中で、保育項目「観察」が意図する経験と学びが誤解されないよう、倉橋は懸命だったろう。

生活の中にある「観察」

一般的に、幼児期は模倣や空想や想像という特徴で語られるが、実は細かい観察も得意だ。道端に光る小さなモノを見つけて拾うし、先生の口紅の色も覚えている。広げたクジャクの羽から冠模様を探すのも得意だ。それだけではない。時には、先生の人格や社会の不条理さえも、子どもは観てしまう。

だからこそ、大人が生活の中身を整え、そ

の内容が現実の社会や自然と遊離しないように配慮しなければならない。駅をテーマにした誘導保育で、実際に子どもたちと駅を見学に行く実践等もその現れであろう。

今の私たちが倉橋や当時の保育者たちと話すことができたなら、その本質的なところでは寸分も変わらなく保育談議ができるだろう。むしろ、先走って知識へと勇んでしまう時代の風潮を共に嘆くかもしれない。

時代の風潮の中で育てるには――

では、なぜ人はその風潮へ勇んでしまうのか？ 不安なのだ。目に見える評価が欲しいのだ。人よりモノを知っていることは優位だから。大人の世界では――。もちろん、知識の量はやがて、より深い思考を助けるし、さらに多くの知を欲する。

しかし、倉橋ならずとも私たちは知っている。その循環の原動力は、感動・興味・関心

であることを。わずか生後六か年の間にいたい何を大切にすべきかを最前線で判断するのは、子どもと日々生活を共にする親や保育者なのだ。先日、歌舞伎役者の中村獅童がテレビ番組で、子どもの頃、井の頭公園の池に映る空を見て「この中へ飛び込めば空に行けるのか？」と本気で思ったという経験談をしていたが、そんなことに科学的答えは無用だ。本稿の中で、「——知つてることがえらいのぢやなくて、自分で実物を、よく注意すること、し得ることが望ましいのですよ。つまり、知識そのものを沢山与へられて持つてゐるといふのでなく、自ら実物から知識をつくり出してゆく心の第一の働きを強くするのですよ」という箇所が、倉橋の最も伝えたい内容だろう。

現代風に換言すれば、幼児の早期学習教材が社会にあふれている昨今、保育現場だけでなく家庭においてもまず大切にしたいのは、

子どものその後の生命の働き（能動性）を生み出す原動力となる心の働きを育むことだと言える。たやすいことではない。

今も昔も——

最後に、昭和十五年でも「——都会の生活では、そういふ自然物に接する機会も少いのですから、幼稚園でその機会を作つて上げるんですね。——」という箇所が文中にある。平成になって大学に入学した学生も「今の子は——」と語り、自身の昔を懐かしみ、自然や社会の変化を嘆いた。

いったい、今日の子育て環境を知つて七十七年前の保育者たちは何と思うだろう。時間は逆戻りできない。さて、今夏をどう過ごすか。

注

NHKEテレ「SWITCHインタビュー 達人達『中村獅童×三原康裕』（二〇一七年二月十八日放送）から